文春文庫

冥府回廊

(下)

杉本苑子

文藝春秋

文春文庫

224-8

冥府回廊（下）

定価はカバーに表示してあります

1985年2月25日　第1刷

著者　杉本苑子

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-722408-9

文春文庫

冥府回廊

(下)

杉本苑子

文藝春秋

冥府回廊（下）目次

第五章　7
第六章　87
第七章　163
第八章　245
後記　307
解説　武蔵野次郎　311

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冥府回廊（下）

第五章

じつは三年ほど前にも、諭吉は脳卒中の発作で倒れている。

桃介が保養地を転々し、川上音二郎夫妻が選挙に敗れてボートによる〝日本脱出〟をこころみたころである。さいわいこのときは軽く済み、三カ月後には慶応義塾同窓会一同が主催する『諭吉先生大患快癒祝賀会』に出席できるまでに恢復した。

場所は芝の紅葉館――。

第六十五回目の誕生祝いも兼ねた大会で、東京地区だけで四百名もが集まった。このほか全国あちこちの卒業生たちが名古屋・大阪・福岡・高松など主要都市約四十カ所で同じ趣旨の祝賀会を盛大に催したが、病中、諭吉には宮中から見舞品の下賜があり、さらにつづいては賜金の沙汰書も伝達された。

夙に泰西の学を講じ、校舎を開きて才俊を育し、新著を頒ちて世益に資すること三十余年、其功績尠からず、因って思召を以って金五万円を賜う。

というもので、諭吉個人への恩賜である。「進退不自由」を理由に、諭吉は長男一太郎、副社頭小幡篤次郎の両名を名代として宮内省に出頭させ、宮内大臣田中光顕の手から沙汰書を受け取らせたけれども、金はただちに慶応義塾に寄附――。学校経営の基本金に加えて、一銭も私しなかった。

政府から、

「授爵の栄典を奏請したいが、お受けくださるか？」

と打診してきたのも丁重にことわって、もっぱら予後の静養につとめた。

在野の涼しさ、自由さが、年と共にいよいよしっくり諭吉の身に附いて、およそ爵位だの大礼服だの勲章といった精神を縛るきらきらしい飾りは似合わなくなってきている。

もともと質素だった食べものの好みも、病気のあと、いっそう淡泊になり、獣肉ばかりか魚まで口にしたがらなくなった。

以前はよく通りすがりに、トントコトントコ俎を叩きたてるリズミカルな音を面白がって、覗き込んだりもした蒲鉾屋の店先を、

「なまぐさい」

小走りに駆けぬけるほどになり、よろこんで食べるのは蕎麦掻きや芋の煮ころがし……。これでは栄養が不足すると家族が心配して、養生園から毎朝二合ずつ牛乳を取り寄せ、むりやり飲ませるありさまで、酒もやめ、もちろん煙草もやらない。病後も絶えることなく実行しつづけたのは朝の散歩であった。

若いころから諭吉は早寝早起きを習慣にしていて、夏冬かまわず午前四時には眼をさます。主人になって家中が早起きだから、諭吉が廊下に出て咳払いすると、それを合図のようにお花ら小間使が洗面道具を運ぶ。

歩きに出るのはこのあとである。

三田の山内をくだって芝の白金、三光町へんを通り、目黒不動あたりからぐるりとあともどりして広尾を経由……。およそ一里半か二里たらずの行程で三田へもどるが、供をして歩く学生は常時二十人をくだらなかった。寄宿舎に寝起きする者、福沢邸の周辺に下宿している者のほか、近くに居を構える卒業生の中からも参加者がかならず幾人か混った。

雨が降ろうと雪の日だろうと、諭吉は休まない。一緒に歩く若い連中を、彼は、

「散歩党」

と呼び、道中いろいろな話を交す。

紆余曲折のあげくようやく幕末以来の不平等条約が改正され、実施に移されれば、外国人の内地雑居問題がとりあげられたし、足尾銅山に鉱毒事件が持ちあがれば、すぐさまそれが話題となった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

諭吉自身、論評する日もあり、塾生相互に議論させて、
「それはAくんの言が正しい」
「こんどはBくんの勝だ」
と、判定をくだす日もある。
もっとも塾生の顔ぶれはなかなか一定しない。朝が早いので、つい寝坊して落伍する者、寒い暑いで怠ける者などさまざまだ。たびたび中止しながら、のこのこ気が向いたとき来たりすると、
「またお始めですか？　でも、まもなく御廃業でしょうな」
からかって諭吉は笑う。
彼はもう大分まえから特別講義のほか教壇に立たない。諭吉の話を聞く機会は『三田演説会』のときに限られていた。それだけで満足できない塾生にすれば、散歩のお供は、その謦咳に接することのできるただ一つのありがたいチャンスなのである。
服装は和服の尻はしょり……。下から二本、股引の脛をのぞかせ、頭に鳥打ち帽、手には長い竹の杖、冬期は手拭をずぶずぶ丸く袋状に縫っただけの指なし手ぶくろをはめ、晴れなら駒下駄、雨なら草鞋をはくというのが諭吉の決まりのスタイルで、一見、田舎のよろず屋の親爺風だった。
もっとも、外見はどうあれこのなりは、多年の経験から割り出した散歩に最適のもので、たとえば下駄ひとつ例にとってもそれなりの工夫が凝らしてある。

従来、男物の下駄といえば歯が厚く高く、総体に大ぶりないわゆる薩摩下駄が主流だったのを、

「どうも重すぎていかん。ひと足ごとにズンズンと脳天に響く。はなはだ衛生上よろしくない。桐は桐でもいま少し軽いやつ。鼻緒もこれまでのものは鹿皮だが皮を用いるには及ばんよ。廉価な織物で結構だから、ためしに作ってみておくれ」

武蔵屋という新銭座時代から出入りさせている履物商に申しつけ、会津産の台桐に細地小倉の鼻緒、形も二回りほど小さくした新形を試作させたのを用いている。履きよく、軽快なばかりか薩摩下駄だと一足二円もしたものが三十五銭ですむ。二カ月間にこれを五足注文し、つぎつぎと履きつぶしてゆくわけである。

「胃をからっぽにして歩くのは身体に悪い」

というのも諭吉の持論で、散歩党のめんめんには朝ごとに門前で菓子パンか蒸かし芋が一、二個あて配られた。

これをかじりながら出発するわけだが、数が余るたびに、

「お釜仙人に持っていってやろう」

となるのも、毎朝の決まりであった。広尾へんをうろつく髭ぼうぼうの乞食で、頭に釜状の破れ帽子をのせている。このため、いつとはなく散歩党仲間から、彼は『お釜仙人』の名を奉られたのだ。

パン一つぐらいでは、しかし帰路は腹ぺこになる。三田の山内にたどりついて、

「くたびれたでしょう、存分に召しあがれ」
錦夫人手づくりの雑煮や汁粉を振舞われると、だれもが生き返ったように元気づくのであった。
散歩のほか、若いころから続けてきたのは米搗(こめつ)きと居合(いあい)の数抜(かずぬ)きで、特に居合は、
「腰痛知らずに過ごすには最良の運動だ」
と、一日も欠かさない。
刀は二尺四寸五分、目方が三百十匁(もんめ)ある。これを毎回、千本以上振るのだが、ツツとそのたびに足を動かすのが合計すると五千二、三百間(けん)にもなる。さすがに過激すぎるというわけで、病後は医師たちの中止勧告を受けた。
「残念だな。ここが夜泣きするぞ、ここが」
腕を叩いて家族を笑わせるほど、気力はしっかりしていたし、声にも表情にも張りがもどって当の諭吉はもとより周囲の眼にも、
「完全に、もとの健康体に復した」
と映る昨今だったのである。
……明治三十三年は西暦千九百年に当る。慶応義塾ではそれを祝って、師走大晦日(しわすおおみそか)の晩から翌三十四年の元旦にかけて塾生主催の『世紀送迎会』が開かれた。
諭吉はこの集まりにも出席し、二十世紀への第一歩を寿(ことほ)いで帰宅したのだが、同じ日、元朝の新聞紙上にでかでか報じられたのは、足かけ二年に及ぶ外国巡業を終え、パリの万国博覧会

ではことに輝かしい成功をおさめて意気揚々、川上音二郎・貞奴夫妻が神戸埠頭に上陸――。凱旋将軍さながらな歓迎を受けた、とのニュースであった。

「どこか見どころのある少年だとは思ったけど、やはりその通りだったね」

新聞の活字を眼で追いながら、屠蘇をくみ交している年始客のだれへともなく、諭吉は言った。

むかし墓地荒らしの現場を抑えて、短期間ではあったにせよ衣食の面倒を見てやった学僕と、新演劇の旗手川上音二郎が同一人物であることは、家人の噂やゴシップ記事などですでに諭吉も承知していた。

「ろくに言葉も通ぜぬ異国で、これだけの名声をかちとるなど並たいていの努力ではないよ。たいした男じゃないか」

褒めはするが、その川上以上の人気者となった妻の貞奴については、故意か偶然か言及しない。

小山貞子の名で、女文字の手紙がアメリカの桃介を追って行った事実は、捨次郎の報告で諭吉の耳にも入っている。その名と、現在の川上貞奴を、結びつけるまでに至っていないのか。もしくは里子あたりから聞かされて、その辺の事情もとうに知りながら、わざと触れずにいるのか。房子にすら諭吉の真意ははかりかねた。

「養生園に舞台附きの大広間があるのはご存知ですな？」

年始客の一人に北里柴三郎博士が混じっていて、すかさず諭吉に諮った。

「一度、川上とやらを呼んで、芝居を演じさせてみてはいかがでしょう」

「くるだろうか。病院の慰問になど……。なにせ仏国政府からオフィシエ・ド・アカデミーに叙されたとか喧伝されている役者だよ、北里さん」
「お世話になった福沢先生の招きなら、いやとは申しますまい。患者たちの要望でもあるのです」
「そういえば、まだ売り出す以前、上野の池之端へ馬術競技を見にいったさい川上が向こうから名乗りかけてきて、オッペケ節とやらをひとくさり唄って聞かせてくれたと、三八や大四郎が話していたなあ」
「ご恩を忘れていない証拠ですよ」
「養生園の舞台で川上一座が公演してくれるなら、わたしもぜひ一見したいものだ」
しかし、この望みは夢に終った。正月も末に近づいた二十五日夕刻、諭吉は二度目の発作に襲われ、意識不明のまま眠りつづけて、二月三日午後十時五十分、家族知友、門下生らの号泣に包まれながら満六十六年の生涯を穏やかに閉じたのである。
訃報が伝わると、日本全国の主要紙・地方紙はいっせいに弔詞を掲げ、衆議院は挙げて哀悼決議案を議決した。
宮中からも千円、祭粢料の下賜があり、葬儀は当然、
「慶応義塾による塾葬となろう」
と取り沙汰されたが、これは錦夫人が固辞したため実現しなかった。
「福沢の死は、一家の私事でございます。塾葬にしたいとのお気持はまことに有難くは存じま

すけれども、多少なりと私ごとに塾のお金をついやすのは、福沢の本意ではございますまい。費用はいっさい当家で負担し、事務上のことだけを義塾のみなさまにお願いしたいと、一太郎、捨次郎らも申しております」

筋の通った言い分なので、塾側も了承し、五名の葬儀委員のうち中上川彦次郎、朝吹英二の二人を親戚代表に、副社頭の小幡篤次郎、塾頭の鎌田栄吉を学校代表に、老医師長与専斎を友人代表に据えて、万端の事務をさばくことになった。

朝吹英二は中上川彦次郎の妹の夫である。はじめ三菱に、のち義兄の引きで三井に入社し、実業界に頭角を現わしつつある人物だが、彼ら五名の協議により葬儀は二月八日午後一時、福沢家の菩提寺である麻布の善福寺で執りおこない、遺骸は府下荏原郡大崎村の本願寺に埋葬と決定。

諭吉生前の主張を尊重し、万事、質素を旨として香奠はもちろん、造花・生花のたぐいなどもいっさい謝絶。ただ柩車の前面に銘旗と墓標、三対の榕を添えるにとどめるとも公表された。

墓標に記す戒名は、

「そんなもの、無用だよ」

と、かねがね諭吉自身、言ってはいたが、一応仏式で執行する以上、

「やはり、つけないわけにもゆくまい」

ということで、小幡篤次郎が『大観院独立自尊居士』の九文字を選定し位牌に墨書した。いかにもつね日ごろ、精神の真の自由、個々の人格の独立と自尊を説きつづけた諭吉にふさわし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com